こっそり 先輩から新入生にすすめる本

（執筆・構成：今福龍太先生「書物論」ゼミ生有志）

エリザベス・キューブラー・ロス、デーヴィッド・ケスラー『ライフレッスン』上野圭一訳、角川文庫、2005 年

著者は共にアメリカの終末期医療の先駆者で、患者との関わりで見聞きしたこと、また彼ら自身の体験から、生きることと死ぬことについて語っている。どう生きたらいいのかに悩んだときに。

ダン・ブラウン『ダ・ヴィンチ・コード』（上中下）越前敏弥訳、角川文庫、2006 年

ベストセラーを敬遠してしまう傾向にある方、これはおもしろい本ですよ。火曜日 5 限開講の木村三郎先生「西洋美術史」で図像学を学ぶと、内容についての理解も深まり、頭がよくなった気がしてさらに喜びが増します。

外大図書館は一見小さく見えますが、多くの蔵書が眠っています。ちょっと手持ち無沙汰になったら、4 階から書庫 2 層まで探検してみてください。よき出逢いを。

ドイツ語専攻 2009 年 3 月卒　和田英子

①中原中也『中原中也詩集』大岡昇平編、岩波文庫、1981 年
②銀色夏生『いやいやプリン』角川文庫、2001 年

①は、大学生なんだから本棚に一冊くらい詩集があってもいいんじゃないかなーと思って。と言いつつわたしはこの本ひとに借りてもう返しちゃったんで本棚に入ってないんですけどね。この詩人は外大の OB でもありますよん。

②は、週六コマの主専とか週二コマの副専とか地域基礎とかその他諸々の授業の勉強、もしくはイラッとする先生とか KY な先輩とかテンションが全然合わない同期とかとの人間関係に疲れたときに読むと、ちょっとはなごむんじゃないかなーと思って。ほんとにちょっとですけどね。でもちょっとの余裕って意外と大事ですから。

スペイン語専攻 4 年　飯村莉江

伊坂幸太郎『重力ピエロ』新潮文庫、2006年（初版2003年）

新入生におすすめする本、と考えていて春っぽいお話がいいなと思いました。その時思い浮かんだのがこの伊坂幸太郎著『重力ピエロ』です。「春が二階から落ちてきた。」という印象的な一文で始まるこの物語は、季節の春とはあまり関係ないのですが、まさに春のようなお話でした。読み終えた後の爽快感と心温まる感じがそう思わせたのだと思います。ある兄弟二人が連続放火事件を追っていくという一見ミステリー小説なのですが、それだけに留まらない作品で家族の愛を感じさせてくれます。ストーリー展開の巧さと魅力溢れる登場人物に否応なく惹かれます。もう大分有名な小説で今度映画化されるようです。受験勉強で疲れた頭のリフレッシュに是非読んでみてください。

中国語専攻4年　増田 茜

フィリップ・K・ディック
『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』
浅倉久志訳、ハヤカワ文庫、1977年

人間のエゴイズムは、実に厄介で、時に頼もしく、それでいて儚いものです。

この作品では、「生身の」生物が至上の価値を持つ世界で、人間の自衛のためにアンドロイドを狩る賞金稼ぎの姿が描かれています。プロットだけ見ればごくありふれた話かもしれません。しかし、彼が人間とアンドロイドの線引きに揺れる様は、人間とアンドロイド、自己と他者、善と悪……そういった二元的思考を一度リセットする意識の大切さを思わせます。

人間主観の既成意識を見つめ直す手掛かりとして、SFというつながりでスタニスワフ・レム『ソラリスの陽のもとに』（飯田規和訳、ハヤカワ文庫）も併せてお薦めします。

Toni Morrison, ***Beloved***, Vintage Books（Reprint）. 2004年

申し遅れました。この度は、ご入学誠におめでとうございます。

これから始まる大学生活の中で、皆さまは一体何度「トニ・モリスン」という名前に出くわすことでしょう。英米語科に限らず、文学あるいは文化の授業で、再三紹介されます。「アメリカ黒人初のノーベル賞受賞作家」という肩書きに思わずビビってしまいそうですが、それはさておいて、まずはこの土の匂いが沸き立つような文章を読んで頂きたいと思います。翻訳版も出ていますので、活用しつつ、余力のある方はぜひ原書に挑戦してみてください。

別役実『別役実のコント教室―不条理な笑いへのレッスン』白水社、2003年

何も無理にコントをやれ、というわけではありません。もちろん、やって頂ければ楽しいと思いますが。

驚くほど自由な、大学生という身分。今までと比べて、自分の裁量に任される部分も一気に増えます。言うなれば自ら生活の脚本を書き、多くのアドリブを交えながら演じるのです。その参考にでもなればと思い、ご紹介します。理性と感性の絶妙なバランスで書かれたこの本は、純粋に読み物としても楽しめます。宴席での話術の研鑽にも役立つかもしれません。私自身、文中にある「ナンセンスは軽やかに」という言葉をいつも心に刻んでおこうと思っています。おっと、自分の話が出てしまいました。

まあまあ、たとえ図々しいと言われたって、人生の主役は結局自分ですよ。

どうぞ遠慮なく、素敵に演じてくださいな。

――今、皆さまが立とうとしている新たな舞台の幕開きをお祝いしながら。

ポーランド語専攻4年　池田和志